

# バイオリージョナリズムに基礎をおいた 上賀茂社家町での環境学習の展開

Development of Environmental Learning at Shake-machi in Kamigamo Area  
based on Bioregionalism

勝 矢 淳 雄  
齋 藤 萬之助

キーワード：バイオリージョナリズム，社家町，環境学習，環境教育

Key Words: Bioregionalism, Shake-machi, Environmental Learning, Environmental Education

## 1. はじめに

京都の北に位置する上賀茂地域は，平安京より古く1300年以上の伝統がある。上賀茂神社あるいはその神事のみならず地域には烏相撲，紅葉音頭，さんやれ祭，やすらい花など多くの文化的行事なども伝承されてきている。また，上賀茂神社の神官（社家）の屋敷があった明神川沿いの社家町は遅くとも15世紀中頃には門前集落として発達したといわれており，少なくなったとはいえ今でも社家屋敷群が維持されている。今では全国的にも珍しくなり，昭和63年には国の重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）に選定され，町並みの保存がはかられている。さらに，社家町の周辺地域も平成9年に京都市から界わい景観保全地域に指定され，より広く地域の環境保全に力を入れている。

しかし，地域の環境や地域に伝わる文化の保全・継承の努力の一方で，地域住民の高齢化・少子化や住宅の老朽化，相続などの種々の事情から社家屋敷や旧来の民家が壊され，新たな建売住宅が建てられたり，地域の新たな開発にともなう新住民の増加などによる地域共同体の弱体化によって，文化的事象の維持が徐々に失われる危機にあるのも事実である。景観や町並みをはじめとする環境と文化の保全は容易なものではなく，何もしなければ現状を維持できるというわけではない。将来に向かって，上賀茂の文化の保全・継承のためには，従来と同様の形態で親から子へ地域の従来の絆を基に引き継いでいく努力と共に，地域の文化を形のみならずその意義について新住民を含めて地域の住民の理解を新たに深め，さらには社会の認識を深める努力が必要な時期に来ている。

上記のような考えを基盤として，上賀茂の文化資産について地域の住民や社会が地域を再認識するきっかけになることを意図して種々の環境学習などを実施してきている。ここでは，子供たちを主な対象にした社家町で行った社家屋敷と明神川の見学会とその展開の経緯を考察する。

## 2. バイオリージョナリズムとは

バイオリージョナリズム (bioregionalism) とは、「生命地域主義」と訳され、ともすれば離れがちになってしまった地域の自然生態系に根ざした生き方に目を向けるとともに、自然生態系だけでなく地域の文化や歴史をも見直し、再評価することによって、あらためて地域に「住み直し (re-inhabitation)」を求める考え方であり、またその運動のことである。かつては地域の自然生態系や文化は、私たち個人個人のアイデンティティの内実を構成するものであり、それは私たちに「豊かな自己」をもたらすものであった。バイオリージョナリズムは住み直しの作業をとおして、そこに住む住民自身が地域との関係を深く自覚し、地域の自然生態系を活かしながら、よりよい生活環境、文化環境を築いていくことを求めている。地域の住民が地域の自然環境のみならず地域の文化や歴史を理解しなければ、地域のあらゆる事物の保全・継承が出来ないことは当然の帰着でもある。地域における環境学習活動などがバイオリージョナリズムの精神に基づくべきことは明らかであり、本活動もそれを強く意識して行っている。

バイオリージョナリズムに基礎をおくことは、地域のことは地域の人たちが主体的に行動し、その行動の中で地域の人たちが地域のことを理解し、住み直しをするのが基本である。しかし、1300年以上の伝統をもって居住する人達から、新しい居住者までいる上賀茂地域、明治以降の居住者ですら未だに「入り込み人」あるいは「入り人」と見られるこの地域では旧来の複雑な人間関係が未だに続いており、何らかのきっかけなしに地域に新たな行動を期待するのは事実上困難な点もある。第三者（地域に居住しない者）が適切な関与をして新たな活動を実施し、地域への新たな刺激と行動のきっかけをつくり、地域に活動を定着させる努力をするのも意義あることである。第三者であるがゆえに可能な活動があることも事実である。また、第三者から地域を見ることによって、地元の人たちが気付かないあるいは当然としてみてきた事柄にも新たな価値を見出しうる場合もある。そこに、第三者が地域の活動に関与する意義がある。

## 3. 地域の状況

安永年間（1772～1781）には上賀茂地域には148戸の社家屋敷があったと言われているが、現在残されているのは20数戸であり、そのうち昔の面影をある程度残しているのは10数戸である。このうち、4戸は京都市の指定（あるいは登録）文化財として保存にも配慮されている。伝建地区内の7戸以外の他の社家屋敷は特別な保存対策はなされていない。ところが、社家町界隈に居住している人達も何が社家屋敷の特徴であるかなどについて必ずしも詳しいわけではなく、まして子供たちはほとんど理解していないのが現状である。実際に居住されているので、外から見る以外社家屋敷に入ったこともないのは当然ではある。地域の人達の中には、子供たちが土塀に落書きをする、魚取りで石積を緩めるなどで、将来の地域を担うべき子供たちを地域の保全のために排除する傾向もあった。地域の子供たちにとっては理解は難しいとしても小さい頃から社家町に良い思い出を持ち、愛着を感じる町づくりをすることが大切である。形骸化した町並みを残すのが地域の保全ではなく、地域の人々の中で活

きていて愛着と誇りを感じる町でこそ本来の意義ある町並み保存である。

住宅と農家が主で、観光を商売としているところはほとんどないため、観光客など他所の人たちが地域に来ることに根強い拒否反応があり、伝建地区では「ここは何もしないところ」との申し合わせもある。このような従来からの姿勢が徐々に町の雰囲気維持を困難にしている。行政も何を持ちかけても「上賀茂は動きのにぶいところ」と言っている。

#### 4. 社家屋敷と明神川の見学会

##### 4-1. 見学会の意義

社家町が伝建地区として国の選定を受けているとはいえ、地元の子供達は勿論のこと保護者も社家屋敷の内部を見学したことがない状況にある。しかし、社家屋敷についても親しく見学させてもらうことから社家町にも愛着を持ってもらえるようになるわけで、地元の人たちが社家屋敷をよく知らないというのは決して望ましいことではない。とくに、次代を担う子供たちにはたとえ理解が難しいとしても、地元の事物に思い出を残してもらうことが現在および将来の地域の環境保全に大切である。

社家屋敷が江戸時代の建築であるので、明神川の水を取り入れた遣水や雨水の吸い込み井戸など昔の水循環利用の形態を残しており、かつ明神川を汚さない工夫をしている。昔は明神川の水がきれいであったことから禊に使い、今もその石組みの構造などから理解できる。社家屋敷の見学ということが、子供だけではなく大人の関心も呼ぶことが期待されることから、社家屋敷とともに社家屋敷での水循環再利用の工夫や明神川の現状についてを知り、日常生活や地域の中での水について関心を持ち、考え、水利用のあり方を学んでもらう環境学習の機会にもすることとした。

##### 4-2. 見学会の状況

###### 1) 平成13年度

###### 1-1) 実施状況

地元の子供達の環境学習と位置づけられるこのような見学会は、地元の人たちが地元や地元の子供達のために行うのが本来であり、それが地元の活性化と社会の理解を深めることにつながる。しかし、地元の理解を得て見学会が軌道に乗るまでは、将来的には適当な地元の団体などに引き継いでいくことを目標にしながらも、当面は地元の団体を形式的には主催者とし、大学関係者は第三者としてこれを支えながら実質的には見学会の準備などすべてを整え主催することが望ましい形態といえる。それゆえ、社家の方との交渉・日程の調整、見学当日のスケジュール、小冊子の作成など見学会実施のためのすべての準備は大学関係者が整えたが、それ以外の地元での活動は、できうる限り地元の団体と連携して進めることを模索した。とくに、大学関係者は地元の小・中学生あるいはその保護者とのつながりはないので、見学者の募集は地元をお願いすることを考えた。

3月に上賀茂小学校長を訪ね、趣旨を説明して協力を要請した。児童と保護者で自由研究として実施している「上賀茂探検クラブ」が適当であろうということで、この募集が行われる4月中旬を待

つこととなった。ところが、4月下旬に電話で問い合わせたところ、今年は児童が集まらずにクラブが成立しなかったということで、小学校を通じての連携は不可能となった。手詰まりとなったので、地元で郷土史家と知られている、また世話好きのF氏に相談したところ、これは有意義な見学会であるし、自分も社家屋敷は外からは知っているが中に入れてもらったことはない。このような見学会を他所の人が企画してもらえることが大変ありがたいので是非実現できるようにしたいとのことで、子供達を集めることに協力してくれることとなった。結果として、周辺の方々に声をかけてくれるうちに、小学校に熱心な教員の方がおられて、子供たちに見学を薦めて集めてくれることとなった。子供を主な対象としたのは、地域に観光客への根強い反発があるので、地元の子供の教育のためということであれば受け入れてもらいやすいことを考えたからである。ただ、どの程度の人数が集まるか分からず、20名以上の児童が参加することを想定していたが、多人数になると大学関係者のうちで実質に世話する多くて4人程度の教員だけでは子供の扱いにもなれていないため対応することが困難であることから、児童の保護者も参加できることとした。

主催団体は、たった2人の集まりではあるが上賀茂黎明(れいめい)会にお願いし、勝矢研究室は企画・協力とした。上賀茂黎明会は上述の郷土史家のF氏がやっておられるが、ほとんど実体のない任意の集まりである。それゆえ、実際は大学関係者がほぼ全面的に実施することとなった。

従来からの関係もあり5戸の社家などの協力が得られた。3戸は社家屋敷の内部や庭園も見せてもらえることとなり、1戸は玄関先と遣水のある裏庭まで、1戸は道からの説明となった。社家町の将来を見据えた子供たちの見学会の意義、目的が理解を得やすかったこともある。多くの内容であったことと、子供達には難しいところもあることから、絵や写真を入れた11頁の小冊子「社家と明神川」を作成した。小学校の行事がわからず、また夏休み前になっていたので、近隣の学習塾が休みに入った後の8月7日に小・中学生とその保護者を主な対象とした社家屋敷と明神川の見学会を実施した。しかし、小学校の行事(野球大会?)と重なり、参加を希望していた男子生徒は0名となり、結果として小・中学生9名とほぼ半減し、保護者5名、大学関係者など10名の合わせた24名で、大人が多い事となってしまった。大学関係者が多くなったのは、将来の参考のために記録を残すために大学の情報センターにデジタルビデオの撮影を依頼したことによる4名が入っているためである。午前9時に小学校の「ふれあいさろん」に集合し、11時過ぎまで実施した。

なお、上賀茂の方々にも社会にも、このような活動を始めたことを知ってもらうために商業新聞に取材をお願いし、京都新聞が記事を掲載してくれた。協力してくれる社家が増えることと、子供たちの保護者が記事を見て見学を子供に薦めてくれることを期待した。

#### 1-2) アンケート結果と考察

見学会の最後に、今後の参考にするために参加した子供達9名と保護者など6名のあわせて15名にアンケートをお願いした。回答のあった選択肢は以下のようである。数字はアンケート総数で、カッコ内は(子供達、保護者など)をあらわす。

- ① 今日の見学会は楽しかったですか。 「はい」 15 (9,6)
- ② 今日の見学会は勉強になりましたか。「はい」 15 (9,6)
- ③ お話や説明はわかりましたか。 「よくわかった」 10 (6,4), 「大体わかった」 5 (3,2)
- ④ 時間は長かったですか。 「もっと長くても説明が聞きたかった」 2 (0,2)  
「ちょうどよかった」 9 (5,4), 「少し長かった」 4 (4,0)
- ⑤あなたが一番興味を持ったことはどんなことでしたか。

小・中学生（カッコ内は同種の回答）

- 1) 入り口の鳥居形に興味をもった。入り口に鳥居形があるなんてぜんぜん知りませんでした。どの社家にもあった鳥居形の大戸口に興味をもちました。(4)
- 2) どの家もやっぱり普通の家とは違う社家独特の感じがでていてすごいなと思いました。(1)
- 3) N家の庭園, T家の庭園 (3)
- 4) N家の庭園の吸い込み井戸 (2)
- 5) 家の郵便のマーク (〒) は、いままでぜんぜん気がつかなかった。(3)
- 6) 家の中がいろいろ工夫されていたこと。(1)

保護者など

- 1) 社家に共通する建物のつくりや庭の様子など、初めて知ることが多く、大変勉強になりました。特に、門のつくり、玄関の形など、説明もわかりやすく、興味深く見せていただきました。(2)
- 2) 水の使い方, 流し方, 生活する上での工夫。古い日本家屋のつくり。(1)
- 3) 明神川の水の利用, 吸い込み井戸に見られる地下水再利用の工夫。内容的には小学6年生には少し難解な部分もありましたが、同じ上賀茂地区に住むものとして地域に対する愛着や町並み保存意識をもつことができました。(1)
- 4) 昔の生活の様子が目に浮かぶようで、もっと上賀茂の昔を知りたいと思いました。思いがけず小旅行をした様な気分になりました。(1)
- 5) 昔の人の生活が少し見えたように思いました。上賀茂に住んでいても、殆んど知らないことばかりで、楽しい時間でした。(1)

最初から小学6年生には難しいところもあることはわかっていたが、内容よりも地元の社家を見学させてもらったという事実（思い出をつくる）をむしろ重視していたわけで、難しい部分もあったようであるが好評であったことが分かる。時間は少し長いと感じた子供たちが約半数いた。保護者（大人）には、見学会後の話の中でもとくに好評であった。地元のこと（社家や水利用など）についての関心と愛着を改めて持ってもらうことができ、水利用の各種の工夫、明神川の現状についても実際に見ることで認識を深められたことが理解できた。

以上のように、見学会は参加者には好評であったが、ある社家屋敷の方からは大人が多かったことについて約束が違うと強い叱責も受けることとなった。関係者が慣れていないために事故などを心配したので大人が増えたことなどを説明し、一応は納得してもらえた。また、地元の方にも不評であり、

その後「ここは何もしないところ。余計なことをするな」との抗議も受けることとなった。上賀茂黎明会のF氏からも当日、この程度の人数で歩くと目立ちますね、と地元の反応を気にする話がでていた。これに対し、将来の上賀茂を守ってくれる子供たちを地域が今から育てなければならないこと、そうでなければ上賀茂の将来はないこと、見学させてもらった家の土堀に落書きをする子供はいないなどを粘り強く説得し続けた。

当日気になったことの一つは、子供たちが他所のお宅に伺ったときの基本的な礼儀作法について教育を受けていないことであった。どの社家のお宅でも家の方が迎えてくれているのに挨拶もなしに家へ上がって行く、部屋の中でも帽子を脱がないなどである。保護者にもまったく期待できない状況である。このことも社家の方の印象を悪くした一つの原因と考えられる。次回からの検討課題となった。

## 2) 平成14年度

### 2-1) 実施状況

昨年に引き続き小学生と保護者を対象に8月8日に見学会を実施した。地元の主催者としては、引き続き上賀茂黎明会にお願いすることにした。昨年の反省から、子供達へのよりよい伝達方法の構築が重要であることがわかったので、上賀茂自治連合会長と相談したところ上鴨少年補導委員会が適任であるとの指摘を受けて、同委員会上賀茂支部長に趣旨を説明し、趣旨を文書にして提出した。この結果、子供達への広報をしてもらうことで委員会の了承が得られた。通常の方法である小学校にある連絡ボックスを通じて連絡を行うとのことであった。

子供達を対象にしているとはいえ、地元で社家町や社家屋敷、そして上賀茂の環境に関心を持ってもらうための刺激になることを一つの目的としており、対象である小学6年生の子供のある家庭だけでなく、上賀茂に居住する人々への広報、理解をうることが望ましいと考えている。この観点から言えば、自治会を通じての地元全体への回覧板などでの広報がより適切といえる。低学年の児童をもつ親も何年後かには自分の子供も参加させてもらおうとの心の準備ができることを期待できるし、社家屋敷の見学ということに地元の関心を高めることも出来、これが社家町の保全への関心を高めることにもつながりうる。しかし、現在のところ実現できなかつたし、種々の状況を判断すると将来的にもなかなか困難と思われる。見学会の意義が地元でまだよく理解されていないこと、見学会自身が必要でも地元で受け入れられていないことなど、言い換えればまだ地元で十分認知されていないことであるが、まだ2年目の試みであり徐々に進めていきながら理解をうるべきである。参加希望者の申し込み、取りまとめは主催者である上賀茂黎明会にお願いした。

社家屋敷に伺ったときの挨拶であるが、これについては前もって具体的に挨拶を書いた用紙を作成し、説明の小冊子と一緒に渡し、見学会の当日に説明することとした。本年は、社家屋敷が京都市指定有形文化財、庭園が京都市指定名勝であるE家も見学をさせてもらえることとなった。合わせて、社家屋敷6軒を見学させてもらえることとなった。

小学生7名、保護者など17名の24名の参加があり、大学と黎明会の5名のあわせて29名となった。

9時から上賀茂小学校のふれあいサロンに集合し、事前に挨拶の仕方や注意と簡単な見学場所の説明の後、6軒の社家屋敷と明神川の水利用などを見学し11時すぎに終了した。人数が多くなったので、一度に社家屋敷に入れないことから2班に分けて見学の最初の部分はそれぞれ別の社家屋敷を別々に見学し、途中から合流するようにした。引率・説明者については、小学校の先生が2名参加したいとのが上賀茂黎明会を通じてあったので、前日午後1時から事前に説明するので当日は引率と説明をお願いしたいとの連絡を黎明会を通じてお願いしておいた。ところが、前日に小学校に行くと、何も聞いていないし、そんなことは出来ないとのことになった。事情を聞いた校長先生が、自分がやりますからとの申し出があった。実地に歩いての説明と社家の方に紹介をし、校長先生に急遽お願いすることとした。もう一人は昨年度も参加した大学の共同研究者をお願いした。著者は新たに見学をお願いしたE家での事故を心配して、E家で対応した。

## 2-2) アンケート結果と考察

最後にアンケートを書いてもらった。主な結果は以下のようである。数字は総数で、カッコ内は(子供、保護者など)を表す。

- ① 今日の見学会は楽しかったかを尋ねた。「とても楽しかった」が15(3, 12)名、「楽しかった」が9(4, 5)名であった。保護者などの大人の方が評価が高いことがわかる。
- ② 勉強になったかを尋ねた。「非常に勉強になった」が16(2, 14)名、「勉強になった」が8(5, 3)名であった。これも大人の方が評価が高かった。
- ③ 説明がわかったかを尋ねた。「よくわかった」が13(2, 13)名、「大体わかった」が11(5, 6)名であった。これも大人の方が評価が高かった。
- ④ 時間が長かったかを尋ねた。「もっと長くても説明が聞きたかった」が4(0, 4)名、「ちょうどよかった」が14(2, 12)名、「少し長かった」が6(5, 1)名であった。これも大人の方が評価が高かった。

全体に、子供たちには少々難しすぎ、時間も長すぎたことがわかる。前回も時間が長いことが半数弱の子供たちから言われていたが、今回はさらに1軒社家屋敷が増えたので、その傾向は強くなってしまった。1軒でも協力してもらえる社家を増やしたいという思い、さらにお願ひした上には訪問しないわけにはいかないということから子供たちの思いと異なることとなった。あまり説明がわからないところに、同様の社家屋敷を多く見ても飽きてしまうということからといえる。

今回大きな問題となったことは、子供たちの参加が少なく、大人の参加が多く、見学会の本来の趣旨と離れたことである。主催者を上賀茂黎明会にしているとはいえ、黎明会のスタッフは1名なので、運営のために大学から関係者が4名参加しているのは当然のことであるが、見学者としての大人が17名と多くなってしまった。さらに問題なことは、子供たちの7名の内3名は、準備を進める過程で関係者から希望のあった伏見地域からの参加者で、地元の上賀茂の子供たちはたったの4名であった。原因としては以下のようなことが考えられる。

- ① 子供達の参加が少なかったことの原因としては、子供達は社家屋敷や社家町、あるいは伝建地区についてまだ十分な知識がなく、また古いことであるから保護者が勧めない限りとくに興味を持ち難い。遊びの要素もない。保護者にとっても社家町のことをよく知っているとは言いがたく、とくに子供達がいる新しく居住した住民にとっては社家の見学といっても必ずしも関心の高いことではないので、子供に勧めることをしない。
- ② 大人は社家の見学といったとき興味を持つ人たちも少なからずあり、大人が参加したがる傾向にある。申し込み先を地元の「上賀茂黎明会」にしたので、近隣関係の上で申し込んで来た人を断り難い状況にあった。また、条件に合わない大人としても希望して断られれば、やはり面白くなく思うであろうし、何となく暗に反発や反感を持たれる恐れもありうることも配慮しなければならない。そうならば、このような見学会などをするのが伝建地区の環境保全のために逆効果になってしまうことになる。そのため、条件に合わなくても申し込んできた大人も受け入れざるをえなかった。
- ③ 参加者を増やすように努力してくれた方がおられたが、人づてに伝わるうちに趣旨や条件に合わない大人が単に社家など見学会があるものと判断して申し込んできた。京都市の他区や他市からの参加者が合計5名になっている。

結果として、子供達の見学会という本来の趣旨に反して大人が目立つこととなった。社家町に関心を持ち、理解を深めてもらうことは、大人であってはいけないわけではないが、子供達に地元の文化を知ってほしい、体験してほしいからという理由で各社家の方々に見学をお願いしていることから、あまり趣旨に外れた形態になることは見学会を今後継続しがたくなる恐れがあることにも配慮しなければならない。また、保護者でない大人が来ることの問題は、子供達を無視して説明を聞くために前に出てくることである。肝心の子供たちは後ろで何も見えずに小さくなっていることが起き、子供たちを前に出してくださいと注意しなければならなかった。大人のためにはまた別の形の見学会を実施することが望ましい。本来、保護者も含めたのは、事故などを考慮して保護者の参加も認めたわけである。しかし、見学会の実施については、リクリエーション総合補償保険にも加入しており、小学6年生であり学区内に活動であることから考えて、地元に関しては今後、保護者など大人の参加はとくには必要ないと考えられる。

前回、問題とした挨拶については、最初に説明用紙を配り教えておいたこともあり、今回はまったく問題なかった。最近の子供たちは、挨拶の仕方などを教えてもらっていないので出来ないだけで、教えればちゃんと出来ることがわかった。

子供達が少なかったことに関しては、地元にもかかわらず、今回のように社家町に関心のある子供達に対象を広げることが考えられる。地元であるがゆえに、日頃からその雰囲気接していることが当たり前のように感じられ、地元の子供達をはじめ保護者にもかえって関心が低くなっていることもありうる。この見学会を昨年実施して以来、著者の身近なところでは自分の子どもにも見学させてほしいとの要望を少なからず聞いている。上賀茂に居住していなくても、社家屋敷などの見学をすることで上賀茂の社家町に関心を高めてもらうのは望ましいことである。対象の子ども達を「社家町や社家

屋敷に興味のある子供達」として、地元の上賀茂の子供達のみこだわらないで見学会を実施するのが一つの改善方法と言える。

小学6年生を対象にしたのは、地元の上賀茂学区に限定しての試みとして始めたこと、最初は何の程度の参加者があるかわからず、また社家屋敷の見学が少しでも理解ができるようにとのことで最高学年の6年生に定めた。屋敷内で騒がれても困るという気持ちもあった。しかし現状から見て、機会を増やす意味からも5年生などにまで対象を広げることが考えられる。中学生については、社家町や社家屋敷の見学としては小学生より適しているといえる。中学校区は上賀茂地域より格段に広くなるため難色を示す社家があり控えたわけであるが、今後は適当な広報方法などを模索し、また社家の説得を試みて中学生までを見学対象者にすることを考慮するのが適当である。

この見学会をはじめようとした当初、上賀茂小学校長との相談の中で児童と保護者のクラブ活動である「上賀茂探検クラブ」の子ども達を対象にすることとしていた。しかし昨年度は、子ども達の希望がなくクラブが成立しなかったのが現在のよう形での実施となっている。本年度は、熱心な保護者の方がおられて、「上賀茂探検クラブ」は活発に活動をしていた。しかし、来年度はわからないという不安定要素がある。この見学会は、一度中断すると社家への依頼など難しくなる恐れがあり、地元への波及効果も考えたとき継続して実施することが大切である。しかし、このような社家の見学会が地元の団体で運営されることが本来であり、上賀茂黎明会に形式的な主催をお願いしていることの意味からも、何らかの形で上賀茂探検クラブとも協調して実施できる方法を模索することも必要である。

地元からは特に何も反応はなかったが、決して喜ばれている状況とは感じられなかった。しかし、見学会で明神川の現状を取り上げたことから、上賀茂自治連合会の世話役の方から、明神川の改修に関する京都市への要望についての指導をしてほしいとの声が掛かり、写真の提供や現状の問題点の指摘を行い、このことを書き添えることが望ましいと伝えた。この効果もあったと思うが、昨年度は通らなかった明神川の川底修復を市が実施することが決まった。平成15年3月に実施された。自治連合会や明神川沿いの方からは感謝され、その後の活動を進める上で大きなプラスとなったといえる。

なお、社会に上賀茂の社家町を知り、理解を深めてもらうために地元と社会への広報にも心がけている。社家町を社会に知ってもらうことが、社家町の保全・継承のための基盤になるからである。見学会について、読売新聞、毎日新聞、京都新聞が記事に取上げてくれた。新聞に掲載されたことにより、上賀茂黎明会のH氏から社家のU氏が新聞を見たので自分のところも協力できることがあればしますよとの伝言があったとの連絡を受けた。早速、お伺いして見学会の趣旨などを説明し、来年からの協力を依頼し、快くお引き受けいただいた。

### 3) 平成15年度

#### 3-1) 実施状況

3年目に入り、すでに見学させてもらう社家の方々には理解を得ているので見学の詳細を得るのは

容易であったが、懸案は子供達をどのようにして集めるかにあった。

しかし、毎年、新聞にも記事にしてもらうことによって地域への広報にもつとめたことも効果があったと思うが、地元の主催団体としている上賀茂黎明会を通じて上賀茂小学校のクラブ活動である「上賀茂探検クラブ」から一緒に見学会をやらせてほしいとの申し入れがあった。地元の子供達の環境学習と位置づけられるこのような見学会は、地元の人たちが地元や地元の子供達のために行うのが本来であり、それが地元の活性化と社会の理解を深めることにつながるので、上賀茂探検クラブとの連携をどのように進めるかを従来から模索していたところであり、著者らの望む方向であったので、話し合いを持ち協力して見学会を推進することとなった。地元との連携と言うことで一歩前進することができた。

上賀茂探検クラブとの協議の結果、小学校と連携して子供たちを集めるのは上賀茂探検クラブ、当日の資料の作成や案内などのその他の事は著者の研究室と分担することとした。事故防止などの全体的な目配りは両者が協力して注意することとなった。主催は従来通り上賀茂黎明会としたが、上賀茂探検クラブを共催とし、京都産業大学勝矢研究室は企画・推進とした。従来から問題となっていた保護者については参加をお断りすることとし、一方、子供たちの範囲を小学6年生のみでなく中学生まで広げることとした。

上賀茂探検クラブが呼びかけたので、クラブに所属している小学5、6年生と今年のクラブ員である中学生の17名の参加希望者があった。これに、探検クラブの世話をするお母さん方3名、京産大の教員2名・学生3名であったが、さらに小学校の先生方3名が参加したいとの申し入れがあり難色を示したが断ることが出来ないで合計11名の大人となり、子供、大人あわせて28名となった。一度に動くことが困難であり、それぞれの社家屋敷も個人のお宅はこれだけの人数を一度に見学することは困難であったので、一般公開している西村家庭園以外は、2班に分けてそれぞれ別の社家屋敷を見学させてもらうこととした。従来のアンケート結果からも多くの社家を見学することが必ずしも適当とは言えず、時間が長すぎるとの子供たちの意見が多く見られたので、それぞれ西村家を含めて3箇所の見学とし、社家屋敷の特徴に合わせて組み合わせた。子供たちに配付する冊子も大部になったので、それぞれの見学させてもらう社家屋敷のみの2種類を作成した。

従来は、小学校の行事が把握できなかったことからやむなく夏休みに実施したが、今回は上賀茂探検クラブの協力がえられたことから、小学校の行事との調整ができ、学期期間中である6月29日(日)に実施できた。9時に上賀茂小学校のふれあいサロンに集合し、ゼミの学生が班分け、挨拶の仕方、見学の注意、見学のコースなどを説明したのち出発した。それぞれの社家屋敷での説明もゼミの学生があたった。11時すぎに見学を終り、アンケートを書いてもらって現地解散とした。

### 3-2) 考察

最初からの懸案であった子供たちの参加をどのように実現するかについて、上賀茂探検クラブとの連携によって初めて可能となり、名実共に子供のための見学会になった。最初から上賀茂黎明会を主

催としているが、実質的に動き、また活動を補完してもらえる上賀茂探検クラブとの連携が出来たということ自体も大きな成果といえる。見学のコースについても従来のアンケート結果を参考にしながら2つのコースが確立でき、今回のアンケート結果からも時間、量ともに適当であることがわかった。14年にお願いした社家のU家の見学をさせてもらえるようになったので、距離的、場所的、内容的に2つのコースがバランスのとれたものになった。従来、見学をお願いしていた社家屋敷で見学コースから外したところには、事情を説明して理解をえた。

社家の見学会ということが、大人は関心を示すが子供たちにとっては必ずしも魅力あるテーマではなく、上賀茂探検クラブとの連携によって参加者が増えたとはいえ、子供たちがどの程度満足しているのかについて懸念していたが、この見学会を実施した後、上賀茂探検クラブに参加する子供たちが増えたということで、アンケート結果の「非常に楽しかった」などという回答も本当と考えてよいと認識している。地域の雰囲気も種々の他の地域貢献活動の影響もあったと思われるが、好意的な雰囲気に少しは変わってきたように感じられた。趣旨と実態が一致してきたこと、上賀茂探検クラブと連携できたことなどによると思われるが、かつて怒られた方も、子供たちの学習に良いことだからどんどんやってくださいと言われるようになった。

見学会終了後、上賀茂探検クラブと話し合い、社家の方々には見学会について既に理解を得ているので今後お願いに行けば特に都合が悪くなければ協力してもらえる状況となったので、今後は上賀茂探検クラブの年間行事の一つとして見学会について主体的に動き、実施してもらうこととした。著者ら大学のゼミはそれを手助けするという形での展開を図ることとした。バイオリージョナリズムの観点からも地元の行事として定着させることを進めることとなった。

#### 4) 平成16年度

##### 4-1) 実施状況

来年の平成17年からは上賀茂探検クラブの行事として上賀茂探検クラブが主体となって活動することとし、必要な準備を今年から進めることとした。

活動を上賀茂探検クラブに移行させるため、前日に勉強会を実地に行い、見学会当日は探検クラブの保護者に社家屋敷の説明もお願いすることとした。実地の勉強会の時に、社家の方には、来年から上賀茂探検クラブの行事として実施するので上賀茂探検クラブからお願いにくることです承をえた。上賀茂探検クラブに所属する子供たちが、他のクラブ活動などで知り合った他校の友達も一緒に見学したいとの要望があり承した。主催は上賀茂黎明会、共催は上賀茂探検クラブと京都産業大学勝矢研究室となった。なお、勝矢研究室が共催となったのは、行き違いであり案内のチラシも上賀茂探検クラブにお願いしたためで



ある。来年は、従来からさらに一步退き「協力」程度の記載にする積もりである。

小学4, 5, 6年生の子供たち19名(上賀茂学区13名, 他学区6名), 上賀茂探検クラブの保護者6名と大学から教員2名, 学生1名, 見学者としての小学校の教員1名の合計10名で, 2班にわかれ, 6月19日(土)に, それぞれのコースを見学し, アンケートを書いてもらって現地解散で終了した。ふれあいサロンでの注意をはじめ社家屋敷の説明も上述のように, 上賀茂探検クラブの保護者が行った。

#### 4-2) アンケート結果と考察

説明や大人の人数の点からも上賀茂探検クラブの行事として主体が移行できたことがわかる。安定した開催が可能となったので, 平成17年からは上賀茂探検クラブの主催として, 社家への依頼なども含め上賀茂探検クラブの行事として実施することとした。大学関係者は説明冊子の作成と当日の付き添いをする事となった。しかし現実には, 日程の調整などの打ち合わせや, 種々の事情でどうしても著者から依頼しなければならない社家屋敷の方などもある。また, 上賀茂探検クラブの部長の交代など体制が変わったときにうまく引継ぎができるかなど, まだまだ見守っていかなければならないこともあるが, 当初の目的のようなバイオリージョナリズムの精神にあう行事になると期待できるようになった。

小学校の先生に限ったことではないのであろうが, 第1回の見学会から非常に熱心に協力し, 見学会当日も何くれとなく子供たちの世話をしてくれた先生もおられたが, 会を進めるにつれ, 子供達にはまったく無関心で単なる見学者の一人としてしか行動されない先生もおられた。その差の大きさに驚かされたのも事実である。

アンケート結果はつぎのようになった。設問に対して回答のあった選択肢は以下のようで, 対象は子供たちのみで, カッコ内が回答者数である。

① 今日の見学会は楽しかったかを尋ねた。

「とても楽しかった」(9), 「楽しかった」(7), 「何ともいえない」(3)。

② 勉強になったかを尋ねた。

「非常に勉強になった」(7), 「勉強になった」(11), 「何ともいえない」(1)。

③ 説明がわかったかを尋ねた。「よくわかった」(9), 「大体わかった」(9), 「何ともいえない」(1)。

④ 時間が長かったかを尋ねた。「もっと長くても説明が聞きたかった」(1), 「ちょうどよかった」(13), 「少し長かった」(4), 「何ともいえない」(1)。

⑤ 人数について尋ねた。

「もっと少ない人数がよい」(4), 「この程度の人数でよい」(11), 「わからない」(4)。

最初の頃に比べても十分よい状況になっており, 現在の2つのコースで, それぞれ内容, 時間なども適当といえる。特に楽しい遊びがあるわけでもないのに, 4年生にはやはり少し難しすぎる点はあるようであるが, 社家屋敷を見学したという思い出が残ればよいと思っている。

## 5. 考察とまとめ

この社家と明神川に関する見学会については、計画段階から地域にほぼ定着させるまでに5年かかったことになる。上賀茂地域に対しても色々な面で影響を与えた活動のひとつとなったが、現状に至ることが出来た理由として以下のようなことが考えられる。

①いつまでも大学関係者が世話をするのであれば必要はないが、バイオリージョナリズムに基礎をおき地元の方が地元の子供たちのために行なう行事として定着させるためには、単に見学会を進めるだけでなく、地元にある大学の一員として地元の方々との間にどのようにして信頼関係を築き、仲間の一人として認知されるかが大切であった。このような人間関係の中ではじめて見学会活動が認知されるので、地元の子供たちのための活動ということだけでは、受け入れられないし、地元は単なる傍観者としてしか機能しなくなる。

信頼関係を築いていくために地元の行事にも出来るだけ参加したりし、その中で頼まれることは積極的に協力していった。さらに、主に地元を対象にした各種の活動を進めた。具体的には、小池の古式泳法の模範演技の開催、スグキの講演会をはじめ、火星や月のクレーターの観望会、社家の特別公開、シンポジウムの継続した開催などである。地元の防火研究会で講演、明神川の改修への助言なども行なった。このような活動の中から、地元を研究材料に利用しているのではなく、地元のために活動してくれているという信頼感が得られるようになった。平成15年には、地元の方々と賀茂文化研究会を設立し、地元の各種団体の代表者に顧問になってもらった。この研究会が設立できたこと自体が地元で受け入れられ信頼されるようになったという証明になる。

②地元浸透していくためには、信頼してもらえぬ形での広報活動が大切であった。この点に関しては、商業新聞が活動を記事として掲載してもらえたことが大きい。新聞社には趣旨を説明し、積極的にお願いし2つの全国紙と京都新聞が毎年のように記事にしてくれた。記事がもととなって、地元協力者がえられた。

③地元種々の形での協力者が得られないとどのような活動も進めるのは困難である。色々な形で地元の方々との仲介役をしてくれた郷土史家として知られるF氏、見学会について積極的に動いてくれた上賀茂探検クラブおよび同部長のT氏、各種の活動に積極的に協力し、助言をしてくれるU氏が得られた事が大きく、これらの方を通じて地元で多くの知り合いもできるようになった。ただ、上賀茂地域は1300年以上の伝統があるがゆえに、人間関係が複雑で難しい面もあり、今後も慎重に進めなければならないのも事実である。

以上のような状況の中で、見学会にかつてあった地元からの反発はなくなり、むしろ積極的に協力してくれる体制ができてきたし、その意義も理解が得られだした。各種の活動についても地元から好意的な雰囲気が感じられるようになってきた。地元にも上賀茂の文化の保全・継承さらには地域の活性化のためには、従来のように何もしないあるいは漫然と続けているだけでなく新たな積極的な活動も必要であるという認識も受け入れられるようになってきており、事実、新たな活動も起こりだしている。社家屋敷と明神川の見学会が大きなきっかけづくりになったといっても言い過ぎではない。

見学会を実施するについては、社家の方々をはじめ地元の多くの方々および大学関係者のご協力や有益なご教示もいただいた。ここに記して感謝する次第である。なお、本研究は、文部科学省の科学研究費（代表者：勝矢淳雄）および京都産業大学総合学術研究所からの助成を受けた。

#### 参考文献

- 1) 井上有一, Alan Drengson 共編「ディープ・エコロジー」昭和堂, 平成14年(2002) 3月
- 2) 勝矢淳雄, 河野勝彦, 齋藤萬之助, 久力文夫「バイオリージョナリズムに基礎をおく社家と明神川に関する環境学習」環境技術, 第32巻, 第3号, 61~68頁, 平成15年(2003) 3月
- 3) 毎日新聞(朝刊)「伝統的「社家」を知って」平成14年(2002) 8月9日
- 4) 京都新聞(朝刊)「社家っておもしろい」平成14年(2002) 8月9日
- 5) 読売新聞(朝刊)「地元の文化に親しむ」平成14年(2002) 8月13日
- 6) 勝矢淳雄, 河野勝彦, 齋藤萬之助, 久力文夫「バイオリージョナリズムに基礎をおいた上賀茂文化の保全・継承とその展開」京都産業大学総合学術研究所所報, 創刊号, 平成15年(2003) 8月
- 7) 勝矢淳雄, 齋藤萬之助「上賀茂地域におけるバイオリージョナリズムに基づく地域研究とその展開」京都産業大学総合学術研究所所報, 第2号, 平成16年(2004) 8月